

第11回夏期特別集会(4)(清里)

十人の乙女

——マタイ伝第25章1～13節——

1964年7月18日

小池辰雄

新天新地への偉大な希望 目を覚ましおれ 根源の恩寵の事実 聖霊の油 呼ぶところ直ちに
天国 聖霊と賜物 新天新地の徴 無条件降伏 我に居れ 恩寵の中に生きているダメな人間
一人びとりがキリストに直結 聖霊の幕屋 存在と使命

【マタイ25】

1このとき天国は燈火を執りて、新郎を迎えに出づる十人の処女に比うべし。2その中の五人は愚にして五人は慧し。3愚なる者は燈火をとりて油を携えず、4慧きものは油を器に入れて燈火をともし携えたり。5新郎、遅かりしかば、皆まどろみて寝ぬ。6夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎えよ」と呼ぶる声す。7ここに処女みな起きてその燈火を整えたるに、8愚なる者は慧きものに言う「なんじらの油を分けあたえよ、我らの燈火きゆるなり」9慧きもの答えて言う「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、寧ろ売るものに往きて己がために買え」10彼ら買わんとて往きたる間に新郎きたりたれば、備えおりし者どもは彼とともに婚筵にいり、而して門は閉ざされたり。11その後かの他の処女ども来りて「主よ、主よ、われらの為ひらき給え」と言いに、12答えて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言えり。13されば目を覚しおれ、汝らは其の日その時を知らざるなり。

●新天新地への偉大な希望

今日はマタイ伝25章1節から13節、「十人の乙女」と題してお話します。第五回の集会ですが、譬話のいくつかを通して、「一粒の麦」において徹底的に信仰の事態を、また、「悪しき家来」の譬話において神の赦しの担い、愛の世界を深くいただきました。今日は希望の世界です。「信、愛、望」と、パウロがコリント前書13章で語っている消息を、三相一貫の意味において学ぶわけです。今度の集会の主題は天国、即ち神の国、また永遠の生命であり、その中心はキリストそのものである。その現在の終末として、終末的現在としての信、愛の世界、また、望みが今度は歴史の終末における望みという、今日はそういう角度の、神の新天新地への偉大な希望をもって、私たちは進んでいく。キリストの再臨に向かって進



んでいく。そういう角度において、今日の譬話を受けとりたい。これが黙示録の世界に通ずるわけです。

いろいろな聖書解釈上の問題は省きまして、中核だけを話したいと思います。

「このとき天国は燈火を執りて、新郎を迎えに出づる十人の処女に比うべし。」

「この時」という「トテ」というギリシア語は、マタイ伝の非常に特徴的な使い方方で、マタイ伝に数十回も出ているそうです。マルコ伝には6回、ルカ伝には15回出ているという。「さてそこで」というようなわけで、ちょうどマルコ伝で「直ちに」という言葉が非常に出てくる。このマルコ伝の「直ちに」とマタイ伝の「その時」はそれぞれ、筆者の癖というか特色があるわけです。やはりここでも、

「天国は……」

という。キリストの主題は始めから終りまで、「天国は」ということです。

当時の結婚、婚姻というものはどういう性質で行われたか、決定的にはわからないとみえまして、学者が困っている。しかし、大体、新郎が新婦の家に迎えられるという形態らしい。そこで、新婦の次女たち十人が新郎を迎えに行くというような事態であるらしい。それでは、キリストの譬話は、その迎えに行く次女たちは何であり、新婦は何であり、新郎は何であるかというような、そんな分析した寓話的な解釈をしないようにしてください。ここで大事なことは、迎えるということが我々クリスチャンにおいてどのようなことであるかというところがこの主題であります。

●目を覚ましおれ

2 その中の五人は愚にして五人は慧し。愚なる者は燈火をとりて油を携えず、

4 慧きものは油を器に入れて燈火をともに携えたり。

「愚か」とか「賢し」とかいうのは、「頭がいい」とか「頭がわるい」とかいうことではない。信仰に目覚めている者がこの「賢し」ということで、信仰が眠っているのが「愚か」ということです。聖書では旧約聖書からして、「愚か」というのは神を信じないことであり、「賢し」とは神を信頼することである。いわゆる賢愚ということではない。即ち、信仰ある神の智慧に即している者——神の智慧は聖霊が与えるものです——神の智慧に即しているところの者が、油を器に入れて、カンテラと共に持つて行った。「燈火」はカンテラでしょう。油を別に器に貯えて持つている。カンテラはもちろん燈火ですから、その器に油を持つているけれども、それが尽きることがあるから、油をそれに注いで尽きないようにする。そういう油の備えを持つている。ところが、新郎が出て来るのが、どういうわけだか、遅いわけです。もちろん、迎えに行くのは夜のはなしらしい。そこで、

5 新郎、遅かりしかば、皆まどろみて寝ぬ。



これは十人みんなが眠ったという。待ちくたびれて眠りましたが、夜半になって、

6 夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎えよ」と呼ばれる声す。7 ここに処女みな起きてその燈火を整えたるに、

もう時間が経つてますから、燈火が非常にうすらいできました。ちょうど、今でいえば、懐中電灯の電池が乏しくなって、電池の予備を持っていけばいいんですが、予備のないのはダメになってしまふ。それで、

8 愚なる者は慧きものに言う「なんじらの油を分けあたえよ、我らの燈火きゆるなり」9 慧きもの答えて言う「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、寧ろ売るものに往きて己がために買え」10 彼ら買わんとて往きたる間に新郎きたりたれば、備えおりし者どもは彼とともに婚筵にいり、而して門は閉ざされたり。

天国は、そのようにして閉ざされるから、いつでもいい加減な気持で入れるというわけにはいかないという。

11 その後かの他の処女ども来りて「主よ、主よ、われらの為にひらき給え」と言いしに、12 答えて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言えり。

ここに「主よ、主よ」とあるでしょ。譬話というのは、何か辻褄があわないようですが、こういうところに、キリストの気合を見なくてはいかん。キリストはその時に、

「主よ、主よ」

と自分を呼んでも、その時はもうダメだよということ、譬話の中に時々直な言葉が出てくるわけです。

「我らのために開き給え」

と言うけれども、

「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」

と言えり。

「私もそのように、お前たちにその時は「知らない」と言うぞ」

と。ずいぶん、キリストも無情なおつかない人だなと思うかもしれない。

13 されば目を覚ましおれ、汝らは其の日その時を知らざるなり。

だから、「目を覚ましおれ」という。この

「目を覚ましおれ」

という言葉は、マルコ伝13章、またマタイ伝24章に2回、25章の今の所、それからルカ伝21章に出ています。その他にもあるはず。キリストのゲッセマネの祈りにおいても、目を覚ましてはいるはずの三人の弟子、ペテロ、ヤコブ、ヨハネというような第一のお弟子さんたちがやつぱりみな眠ってしまった。あのお弟子さんたちも、キリストの一番大事な祈りの時に眠ってしまう。私たちの魂がいかに眠りやすきものであるか。しかし、「目覚めよわが魂」という。私たちの魂をして眠らしめず、目覚めさせるところの力がある。その



ことに主題がかかっていくわけです。

● 根源の恩寵の事実

信仰ある智慧ある者、慧き者は油を器に入れて、灯火と共に携えていた。

「灯火は信仰を意味するものであり、油は業を意味するものである」

というのがカトリック的な解釈だそうです。その反対に、

「油は信仰であって、灯火の方は業である」

というのがプロテスタント的な解釈だそうです。しかしながら、カトリックとかプロテスタントとか、解釈がどうであるかである、どっちが本当である、というようなことを別に決めることはない。キリストは何もそんなことを限定して仰ってはいない。

聖書を見ると、「油」というものは、信仰というよりもむしろはつきりと聖霊を意味しているということはヨハネ書簡の中にも出ています。ヨハネ第一書2章27節、

「²⁷なんじらの衷^{うち}には、主より注がれたる油とどまる故に、人の汝らに物を教える要なし。此の油は汝らに凡ての事を教え、かつ真^{まこと}にして虚偽^{いつわり}なし。汝等

はその教えしごとく主に居るなり。」(ヨハネ一2・27)

この場合の「油」は、言うまでもなく、聖霊を指します。そのことは20節にも、

「²⁰汝らは聖なる者より油を注がれたれば、凡ての事を知る。」(ヨハネ一2・

20)

とある。

「油注がれたる者」

とは、

「キリストス」「マーシユアツハ」「メシヤ」

という。「油注がれたる者」とは即ち、聖霊を注がれたる者なんです。キリストはその聖霊のバプテスマをなさる方である。これは洗礼のヨハネがはつきりと示したことです。キリストのバプテスマは聖霊のバプテスマです。

私たちは聖霊のバプテスマを本当に受けることによって変えられてしまう。生来の人間はそのバプテスマを受けたからといって、その瞬間からガラリと全部がよくなるなんて、そんなことはありません。相変わらずいろいろな癖がありまして、申し訳ない存在です。いわゆる体験論を言っているのではない。それぞれの体験の様式があります。この聖霊のバプテスマを

「自分は受けているんだろうか、そんなことは知りません」

と言うような人でも、もちろん受けております。十字架の贖いを本当に心にいただき、そして、

「もう、自己^{じこ}というものから本当に自分は解放された。何という自由であるか。こ



の魂の自由は何と素晴らしい」
 という喜びの世界に入っているときに、即ち「喜びの油」、聖霊は既にその人に臨んでいるのです。

私が聖霊のことを強調するからといって、決して現象面を言っているのではない。実は、根源の恩寵の事実を言っている。空気を吸っているのは、私たちは無意識で吸っているが、そのように魂はキリストに在るときに、それぞれの様式をもって、在り方をもって現象する。その人その人はみんな性格や才能が違いますから、

「あの人はあめであるから、聖霊を受けている」

とか、「より少ない」とか、そんなバカなことはない。そういう現象面の奥の世界の、本当に安らかな、神における平安というところに、私たちが聖霊を強調する本当の意味はそこにある。いわゆる宗教が盛んになると、現象にとらわれますが、その現象にとらわれず、根源の現実が本当であるというところに深く行っていただきたい。

しかしながら、私自身の経験からしまして、私はどうも少しパトス(感情・情熱)的な人間だものだから、聖霊の現象も正直起きた。全身が痺れてぶつ倒れるようなことがあります。とにかく、私もダメのカスでありますけれども、しかし、事実、主イエス・キリストの恩寵というものは、これは何を拒んでも拒むことができない事態であります。

●聖霊の油

こうで

「油を貯えている」

というのは即ち、主の本当の生命を生命としていること。この五人の者が同じ聖霊の油を持っています。そして、灯っているこの灯火はみな同じ色かと思うと、私はそうは思わない。この灯火の色は、あるいは赤い灯火、あるいは黄色い灯火、あるいは青い灯火。いろいろ虹のごとく七色の——ここは五つだけれども——その五つがみな違った色を持っている。油は同じだけれども、灯火の色彩は五つそれぞれである。註解書を見て、そういうように書いてあるのを私はまだお目にかからない。しかも、その聖霊における色彩というものは光を持っています。書かれた色はなかなか光が出ませんが、光を持つ。カラー写真はきれいだけれども、スライドで光を通して見ると、その映つてくるところの画面には光がある。そこで、スライドは素晴らしい。いわゆるカラー写真よりも、スライドの方が素晴らしいというの、後ろからきている電気の光で現実の光ある現実をそのまま映している。私たちは、ただ信仰ではない。聖霊の油というものをもって灯っている灯火はそれぞれのカンテラを通して、それぞれの光を放っている。これは五つですが、七つが虹の如く光るわけです。

飛行機で上に昇ると夜、街の灯火が見える。これは実にきれいです。どんな宝石もかなわ



ない。飛行機の上から夜、街の光を見ていると、東京はなんときれいだろうと思う。昼間見るとしようがない街ですけども、この光だけを見ていると本当にきれいに見える。私はそのことを一番先に感じたのは、テヘランという街に上からジェット機で下りてくるときに、ああなんとテヘランという街はきれいなんだろう、とても東京はかなわないなと思った。東京へ来たたら、やっぱりそれに決して劣らない美しさを持っていましたが。どこの街でも、光が闇の中に光っているというのは素晴らしいものです。

クリスチャンがこの聖霊の油でもって、それぞれ、理性的な人は理性的な光を放ち、感情的な人はその聖化された感情の光を放ち、意志的な人はその意志的な光を放ってください。みなそれぞれ神さまから賜った私たちの才能というものは聖霊によって浄化されて、そして、この賜りたるものはすべて善からざるはなしです。

「あの人たちは自分と少し種類が違う」

だとか、いわゆる人間的なえり好みはいかん。本当に聖霊が来ていけば、そんな好き好みはないはず。聖霊が来ていけば、

「ああ、あの光をもつて聖霊が現象しているな」

と。それが即ち「賜物」の世界です。パウロがコリント前書12章で聖霊のことと賜物のことをはっきり言っている。

「聖霊は一つであるが、賜物は種々雑多である」

と。そうでなければならぬ。我々の身体はみな同じ血が流れている。神経が全身にわたっている。手と足と目と鼻と耳と、みなそれぞれの役割を果たしている。けれども、これはみな生命の連なりである。一つの生命です。一つの生命が現れて、そして、その全体が有機的な構造をなしている。これがキリストの体からだです。私たちが、キリストの体というのは、聖霊というひとつの生命力、この真理なる生命力によって限りない展開をして、それが偉大なるハーモニーを、調和をなす。

「あの宗派がどうである。この集会がどうである」

と、そんなことではない。「エキュメニカル(教会統一運動)・チャーチ」というようなことをいっても、在り方はみな、カトリックであろうと、プロテスタントであろうと、何だっけいいですよ。もちろん、それぞれ欠陥もあります。また、直すべきところは直さなくてはなりません。けれども、大事なことは、その相対的な形態の奥に絶対的な一がある。そうすれば、みんなてんでんにしながら、お互いに本当に尊重することができる。そこにおいてキリストの姿を信じて見ていくことができる。こういう魂にならなかつたら、本当の平安も、本当の喜びもこない。

だから、

「わが信仰」

と言っではないかん。信仰を私してはダメです。信仰にすら絶するところに本当の信がある。



キリストはかくのごとく私たちを形成なし給うという、そのありがたき恩寵においての信。恵信一如の世界です。恵みと信仰とは一で、恵みが土台です。その恵みの具体的内容は何かというと、聖霊である。キリストの生命である。キリストの生命ですから、どこまでも、福音書のこのキリストにドラマチックにぶつかって——頭で解釈するのではない——本当にイエス・キリストを身体に受けとる。そのときに、この「油」がどのような内容を、私たち一人びとりを通して賜物として展開していくか。

「グナーデ」(恵み)と「ガーベ」(賜物)とは違う。即ち、「グナーデ」が元であって、「ガーベ」はそれから一人びとりを通して派生する。どうか、このことにおいて、皆さんは決して、類型的に、いわゆるタイプをもつてものを考えないようにしてください。個々の個体を通して、そしてそれが本当の有機体となっていく。そういう意味において、各個が個において本当の全が表れるんです。

●呼ぶところ直ちに天国

この草の葉一つを見て、また路傍の石一つを見て、ここに宇宙の真理が隠されている。一つの宇宙の創造の中にある。私たちの身体も物理的というならば、星を形成をしているものと同じものをここに持っている。

「私たちは死んで星になる」

という、ロマンチックなお伽話のようだけれども、あれは実は科学的にいつても、それと共通なものを持っているんです、物理的にいいにしても。

いわんや、霊的に、霊の世界において私たちが神さまに造られ、神さまの似姿に造られた。この似姿が本当にキリストによって回復され、新創造された。そのことが具体的であるためには、どうしても、キリストの生命が来なくてはいかん。

申し上げているとおり、十字架の贖いによって本当に私たちは自我というものから解放されましたから、そこで、楽に、

「はい、主イエスさま」

と言って、もう御言を読めば、直ちに御言が霊となり生命となって、私たちの中にしみ込んでくる。十字架が本当に受けとられていれば、この聖霊は直ちにその時に来ているんです。

「どういう現象か」

ではないですよ。どうか、皆さん、現象にこだわらないでいただきたい。

その時に、その人その人らしい油を通して、その素晴らしさが展開していく。五人の慧さとしき乙女たちが待っている姿は、そのような聖霊を常に祈りの世界で受けとっていく姿です。聖霊の油が尽きないためには祈りが大切です。祈りの世界と、もう一つは聖書を深く身読すること、身体で読むことです。聖書を本当に身体で読む。

霊と言とは離せない。



「はじめ
太初に言(ロゴス)あり」

という「ロゴス」とは、これは霊言です。霊言というのは具体的に、天界のキリスト、霊的なキリストです。霊的なキリストがこの肉の姿をもって現れた。「受肉」という。そのようにして、十字架のキリストの贖罪、徹底的な赦しで、私たちにはもはや問題はない。過去も現在も未来も

「汝らは完全に贖われたる者なり」

ということでありますから、私たちの相対的な現実はダメであっても、どうか、そんなものに囚われないようにしていただきたい。

この油は尽きません。不滅の灯火です。私たちは呼吸してますね。呼吸している空気はいつも吸っているでしょ。私たちの相対的な生命が地上でお終いになるまで、心臓は、眠っていても鼓動している。どんな素晴らしい時計も止まります。心臓はスイスの時計以上です。私たちは無意識に空気によって生きています。これが尽きざるところの生命の実体であります。いわんや、この聖霊を私たちは——ただ言葉で祈るのではない。魂が祈り心地であれば——この魂は常にこの聖霊を吸っている。パウロが

「御霊を熄すな」

と言った。「熄すな」とは、そのように祈って神さまと常に会話している。その生命を受けている。その懐の中に自分を入れていく。

祈るとはキリストの懐の中に入ることです。祈りとはキリストの懐の中に入ること。イエスは

「父よ!」

と呼べは、イエスは直ちに神さまの懐の中にある。「主よ!」と言えば、その時に直ちに懐の中にありという。いいですか。

「南無妙法蓮華経」

とか、

「南無阿彌陀仏」

とか言つて、仏教の世界で坊さんたちは——空念仏ではなく——本当に祈れば、この世界に直ちにある。親鸞も日蓮もみなその通り。私たちが

「主イエス・キリストよ!」

と呼びたてまつれば、即ちその世界にある。そこが即ち天国です。呼ぶところ直ちに天国である。

●聖霊と賜物

希望というのは、実体が既にここに来ていなければ、本当の希望にならない。それはへブル書11章の言葉がもつともよく表している。1節、



「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。」(ヘブル11:1)
信仰は「エビデンス」(証拠、根拠、証言)であり、「サブスタンス」(実質、本質、実体)であるという。信仰は望むところの確証であり、また実証であるという。望みの事態は、

「御国を来たらせ給え、天国を来たらせてください」
というキリストの祈りは、天国がわがうちに、胸の中になれば、本当は祈れない。
「天国はわが胸の中にある」

とは、申し上げているとおり、

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

ということ。神の前に、キリストの前に自分を何もとも思わない。

どうも、私たちはダメなものだから、

「自分はどうも、こうであります」

と言って、自分というものを見ますよね。自分を問題にして、思い煩って、神さまの恩寵をなぜ拒むか。恩寵は絶対なものであって、拒む理由はない。拒もうとする何かの気持はみなすつ飛んでいるんです。

「はあ、そうでしたか。もうすつ飛んでいたんですか。何も思い煩いはなかった。

そうですか」

と。それだけの話だ。「はい」と、絶対無条件に「はい」と言う。どうですか。その時に、何か知らんけれども、非常に楽になる。いいですか。

天国は来ているではないですか。天国が来て、この「サブスタンス」(実質)が、「エビデンス」(確証)がここにある。実証でありますので、

「御国を来たらせ給え」

という祈りは今度は本ものになる。

油をいただきながら、灯火を灯している。即ち、キリストの聖霊の恵みをいただきながら、その人その人らしい賜物が展開している。私はそう思います。いわゆる信仰でも、いわゆる業でもない。そういうように、正にこの聖霊と賜物の関係が、この油と灯火の関係であり、その灯火はそれぞれの光を発している。皆さん一人びとりが本当に天下一品の存在として輝いている。

輝くのは油があるからです。

「油注がれたる者」

とは皆さん一人びとりのことです。「キリスト者」とは何ですか。「油注がれたる者」という意味ではないですか。キリストというのは「油注がれたる者」です。私たちはみな

「小キリスト」

というように、恩寵の世界で入っている。芥種一粒の小キリストがあなた方の中に入っている。これが大きな樹となっていく。やがて神さまが来たらせ給うところの最後の新天地



地の望みは、常に新天新地が皆さんの中に開示されているから、この望みははつきりしている。どんなに現実が惨憺たるものであつても、世界がひっくり返つても、神の国は必ず来る。これが聖書が約束しているところの事態です。であるからこそ、現実がどんなに望みなきところでも、なお望んでいくということが出来る。絶対の天国を持っている人が相対界で最も忠実な歩きかたをしていく。

「私たちには将来があるから、今はどうでもいいや」

なんて、そんなのは本当ではない。どうでもいい世界に本当に真剣に歩いていく。社会問題があれば、社会問題とつくんでいく。政治問題であれば、政治問題と取り組んでいく。また、医療のことであろうと、芸術のことであろうと、みなこれ空しからざること一つもない。

「二つの善き業も神さまはそれを空しくしない」

とキリストは言っておられる。それは、キリストの栄光の現れであり、またイエスのためであり、福音のためであり、何という素晴らしい本当の平安と力が来るかと、そういうこととです。

希望は既に来ているから本当の希望である。そうでないものは願望です。

「成るであろうか？」

という疑いの世界は希望ではない。

「希望は本当にある、必ず来る」

ということとは、誰が否定しても否定することのできないものがある。これが、聖霊が私たちに与えてくださっているところの恵みである。キリストという方は、もう何億人であろうと、地の涯までも世の末までも、一人びとりに全的に臨み給う。

そういうわけで、この「十人の乙女」の譬話で言われているように、キリストを、神の国を待つところのこの五人の乙女の如く、私たちは、今申し上げたような、そういった待ち方で行くのです。ところが、信仰を持たない、そういった信をいただいていない愚かなる者たちは、せっかくの一番大事な御霊のキリストという実体を、油をいただいていないで、ただ灯火だけだから——灯火だけというのは即ち、自分のいただいているひとつの才能、それに多少、信仰のワサビが付いたようなもので、始めは大いに信仰的英雄みたいで、勢いはいいよ——そういう信仰は始めは勢いがいいけれども、落ちてしまう。

「私はもうどうにもなりません」

と言って自分を棄ててかかると、これは上へ昇っていく。これが御霊における信です。

●新天新地の徴

さつき司会者が「全身を口としている」ということを言った。皆さんは、全身を目にしたつていい。あるいは全身を耳にしたつていいし、全身を手にしたつていい。編み仕事のうま



い人は全身が手みたいな人だ(笑)。その編み仕事を通して神の業を展開している。その人の全存在が、その人が一番特色としているものに集中して、そこにおいて神の業を現していつてください。私は、そういう意味で本当に尊重したい。決して典型的になつていたきたくない。

自己の信仰に絶する、絶、信の、信というような、この信が御霊の、信なんです。何か自分で力んでいるような信仰は、終いにくたびれてしまいますよ、主観的な信仰は。けれども、それを逆に——主観ではなくて——主体的な、主が体となっている、御霊が主体となつて導かれている信仰は、これは上昇していく。

「外なる人は日々に崩れていくかもしれないが、内なる人は日々に新たなり」

とパウロが言った信仰はこれです。私はいつ死んでもいい。それが「日々に新たなり」の信で、歳をとればとるほど逆比例してこの内なる生命力が出てくる。永遠の生命とは、油の世界は、キリストの御霊の油の世界はそのようなことです。皆さんの肉体は、いろいろな欠陥がある方もあります。けれども、肉体の欠陥がどうであろうと、内側から本当は素晴らしい力が来ている。

今日は終末的な希望の、イザヤ書35章の、

「荒野とらうるおいなき地とはたのしみ、沙漠はよろこびて番紅の花のごとくに咲きかがやかん。²盛んに咲きかがやきてよろこび且よろこび且うたい、レバノンの栄をえ、カルメルおよびシヤロンの美しきを得ん。かれらはエホバのさかえを見、われらの神のうるわしきを見るべし。

イザヤは素晴らしい世界を既にのぞんで歌っている。これは詩です。

³なんじら萎たる手をつよくし弱りたる膝をすこやかにせよ。⁴心さわがしきものに対していえ、なんじら雄々しかれ懼るるなかれ。なんじらの神をみよ、刑罰きたり神の報きたらん。神きたりてなんじらを救いたもうべし。⁵そのとき聾者の目はひらけ聾者の耳はあくことを得べし。⁶そのとき跛者は鹿の如くにとびはしり、唾者の舌はうたうたわん。そは荒野に水わきいで、沙漠に川ながるべければなり。」(イザヤ35・1～6)

イエス・キリストがああ相対的現実において、このイザヤが預言している現実を、その徴を現し給うた。キリストのあの奇蹟の業は、この最後の新天新地の徴です。決して御利益ではない。徴は今現れなくてもいい。けれども、神さまはよろしきにかなつて徴をまた現してください。現れようが現れまいが、本当の信とは、あなた方のこの身体の中に既に進んでいる。

今ここに目の見えない方が三人いらつしやるけれども、素晴らしい歌をうたい——私たちは目をつぶつたら一歩も歩けないが——お歩きなさるじやないですか。そういったような事態は、いかに内なる目がこのキリストの光でもつて動いているか。私は本当にこの三



人の目の見えない方々の在り方に頭がさがる。私たちは見えるような顔をしているけれども、本当に見えているかわからんですよ。

「見えると言う者が実は見えないで、見えないと言う人が見えている」

と、キリストがヨハネ伝9章で言っておられる。本当の現実、キリストは見ていらつしやる。また、本当の現実を、内なる現実をキリストは創造していらつしやる。救いというのは、常に現在のにそして未来に向かつて進んでいる。決して、

「今はどうでもいっしょ」

ではない。今の世界が一番、望みの確証なんです。この世界はどんなに惨憺であるとしても、あなた方一人びとりが天国体である。天国体であるから、どういうところにおいても現じていく。どんなに回りが暗くても、これを明るくしていく。どんなに冷たくても、これを暖かくしていく。これはキリストの霊です。どんなにそれが間違つていても、義しいものにしていく。

クリスチャンというものは、それぞれの文化的な事態を展開していく。一番根源的なものは福音の事態です。福音こそが真の文化を展開していく。福音は根つこの世界であつて、幹と枝葉と果はみな文化の世界で見える世界だが、見えざる根つこの世界が深く深く深く深く、その文化は本当に花咲いていく。あなた方は単に、福音を受けて非文化になったらダメです。福音を受けなければ、本当の文化を展開していくことができない。そういう、実にサウンズ(健全)といえ、本当にサウンズな世界なんです。

何か宗教の世界というと、日本人は非常に間違いをしている。だから、私は学校でも青年諸君に言っている。

「君たちの一番大事なことは宗教の世界である。「レリギオ」(宗教)とは「結び付く」

ことである。本当に絶対的なものと結び付かないで、どうして、蓄電池みたいな

ことしていくか。電気は、結び付きの根源の電力源を持っているから、消えない。

懐中電灯はすぐダメになってしまう」

と。本当の望みというものは、そういう油のあるところにごそある。どんな嵐が来ても、人生の運命がどう展開しても、環境がどうありましようとも、どんなに悲しいことが、苦しいことがありましようとも、いいですか、このキリストに在って担えないことはない、突破されないことはない、包みえないことはない。それだけの生命ですよ。

●無条件降伏

皆さんは、この五つの集会を通して、こんぜん渾然一心の中に浸りこんだ。私たちは、集会ごとに前進なんです。決して、繰り返してはいない。キリストは、

「我は今日も明日も次の日も進み行かざるを得ず。我は父と働かざるを得ず」

と仰った。働くことが楽しみである。動くことが楽しみである。しかも、それは静中の動、



動中の静と言いまして、楽な境地を持っている。

さきほど、私はセレン・フアビルトツピングという方にお目にかかった。その方が私に、

「賀川豊彦、内村鑑三のキリスト教の流れの中に、非常に大事なものを自分たちは

感ずる。今、日本のキリスト教の使命は重大なものを持っている」

ということを仰ったので、私は驚いた。そういうようにして認識してくださっているかと。賀川先生が棄身で庶民の中に入って、自分の目がついに眼病に罹ってしまい、終いには失明なさるほどでした。川口さんのところにも、

「一枚の最後に残ったこの衣 神の為には猶脱がんとぞ思ふ」

という句がかかっているではないですか。あれを実践されて行かれた。賀川の名前は世界に一番響いている。内村鑑三以上に響いている。内村先生はまた、

「教会組織ではない。本当に生命の世界だ」

と言って展開なさった。けれども、私たちはいわゆる無教会主義、イズムではありません。福音はいかなるイズムをも超越したものである。一切のイズムを超越したところのものが福音であるので、こちら側から絶対に福音は限定されない。我々は福音によって限定されつつ、それぞれの特殊性をもって全なるものを、特殊において普遍なるものを現していくのが、この私たち一人びとりの姿でなければならぬ。その特殊性を言い張ってはいかん。それはパリサイになる。キリストが一番嫌われたのは、この自己義認のパリサイというやつです。ヘタすると、その角度になる。熱心であつて、いわゆる「純粹」というようなことを言っていると。一切のものを包摂するところの、

「直き者にも直からざるものにも、義しき者にも義しからざる者にも、陽を与

え、雨を降らせる」

という、偉大なる大慈大悲といいますが、大愛ということです。

恵みは来ているが、その恵みをどう受けるかということによつて、自らが審かれるだけの話です。この絶対恩寵は絶対なだから。あなた方は何の条件を考えているか。こちら側の条件なんか一つもないではないか。無条件です。無条件降伏すれば、無条件に素晴らしい世界に入れる。一番素晴らしいことは、

「それだけはまあまあ」

と言つて受けとらない。これはどういうことですか、人間というものは。これを「罪」という。信じざることを罪という。マルチン・ルターも言っているとおり、

「不信は最大の罪である」

というのはそのことなんです。恩寵がかくも来ているのを受けないということが、罪の罪たる悲しいことです。

せっかく、油は与えられているのに、その油を本当に受けとらないで、あわてて油をもらいに行つたつて、その時には天国は閉まつてしまふ。



「我、なんじらを絶えて知らず」
と言われてしまう。キリストの恩寵の陰にはそのような審判がある。「絶えて知らず」とキリストは凄いことを仰る。

●我に居れ

それだから、

「お前たち、目を覚ましていろ」

と。「目を覚ます」というのは何も、力んですることではない。シラーは非常に理想主義家で、眠くなると、戸棚からリンゴの腐ったのを出して、リンゴの腐った臭いで目を覚ましたという。そして、彼は勉強し仕事をした。その精神たるや、私はやはりもちろんシラーという人に敬意を表します。それであるから、シラーはあれだけの仕事を、短命でやった。素晴らしい人です。自分が或る思想で行き詰まったときに、

「これはいかん。自分はもう詩作をやめる」

と言って、十年間沈黙して、カント哲学と歴史の研究をして、内側を見てから、それから作りだした五つの戯曲がドイツ劇文学の最高のものになってしまった。それだけ、徹底したものを持っている。その精神は大事ですよ。ただし、リンゴでなくていい(笑)。

私たちは、聖霊の祈りの世界に入れば、目が覚める。「眠らなくていい」と言っているのではない。眠るときにはしっかりと眠る。キリストだって、嵐の中で眠られたではないですか。あれは眠ついても目が覚めている。魂は覚めている。「魂が覚めている」ということはどういうことか。信頼していることです。神さまに本当に信頼して、幼子が懐に眠っているように、嵐の中でも沈みそうな舟板を枕としている。至るところこれ枕あり。

「人の子は至るところ枕なし」

とキリストが言われたけれども。キリストは実は枕があつた。至るところを神さまの懐とされていた。

来たるべき神の国は明日にも来るかもしれない。いつ来るかもしれない。

「盗人の如くやって来る」

という。そういう「盗人の如く」という譬えが方々にあります。それでは、

「今、二千年たったから、キリストの再臨はなかなか来ないか」

と。何を勘定しているか。二千年たったから、いよいよ質は、度合いは強くなっている。イエス・キリストも使徒たちも、神の国が、世の終りが来ることを間近に望んでおられたけれども、相対的時間的にはそんな早くは来なかった。

「二千年だからキリストでも当てがはずれたから、私たちも当てにすることはない」

なんて、そうではない。「いつ来るか」ではない。延びていれば延びているほど、神さまは——ペテロにも言われたとおり、



「人ひとりも滅びに至ることは神さまの御意にあらず」

という―「万人これ救済」という本願を持つていらっしやるので、深く待ち望んでおられる。

けれども、いつか、決河のごとく、晴天の霹靂へきれきのごとくなことになるかもしれない。このことは預言者エレミヤの中にもあるし、また、黙示録の中にもあるとおりです。明日にも、いや今晚にも、いや今にも、天地が震撼して巻き去られてしまったとしても、

「はい。アーメン、ハレルヤ!」

と言って迎えることができるためには、

「目を覚ましておれ」

とは何であるか。

「現実にも、その信の世界に居れ。我に居れ」

ということです。「我に居れ」ということが、

「目を覚ましておれ」

ということ。

「キリストに在る」

ということ。ヨハネ伝の「我れ汝のうちに、汝わがうちに」という消息です。

「我れキリストのうちに、キリストわがうちに」

と、パウロが書簡の中で164回言っている。

「エン・クリストー」(キリストの中に)

という。「中に」の世界にあることが、目が覚めているということ。どうか、ゆっくり眠ってくださいよ。

「信仰の世界はなかなか困ったな。睡眠不足になりそうだ」

なんて、そんなことはない。そういうように、非常にありがたい世界です。

● 恩寵の中に生きているダメな人間

どうか、私の過去がどんなにダメなものでありましても、そんなことは見ないでください。

私はそういった現在に、常に自己を乗り越えて脱皮しながら進んでいる人間ですから。人間小池を捕まえて、

「あの野郎はこういうやつだ」

なんて言ったって、知らんですよね。その先へ行っておりますので(笑)。それは影を捕まえて、それを小池だと思っても、影は捕まらない。私の実体は見えない。

皆さんも、そのようなことで、お互いに、現在のこの救いの世界を受けとって行く。

「いや、現在も破れ器だから、現在を見たらダメではないか」

なんて。はい、その通り。けれども、見えないところがあります、現在の中に。その現在



の见えない世界を信じていく。

人を信じていくということは、その人を救うことなんです。私たちが本当にキリストの信をもって人を信じ、キリストの愛をもって人を愛していくならば、またその人を望んでいくならば、その愛され信じられ望まれていく人はその愛によって、その愛の世界に救われ、その信によって信の世界に救われる。その望みの世界によってその望みに救われる。

そういうようにして私を見てくださるのでなければ、私は今日限りもうこの集会を辞めます。私は泣きたいほどキリストの福音に、この恩寵の中に生きていくダメな人間です。私にこの終末の望みが今、現に來ている。私もいつかこの地上を去るでしょう。しかし、この一人の一番ダメなやつがキリストの信を信じ、望みを望み、愛を愛として生きてきた。その生涯はマイナスそのものであったが、相手をその一点で信じるというなら、私は感謝します。そういうことでございまして、この集会を去って行った友人たちを本当にその意味で、私自身は申し訳なく思うが、どうか、そういうものであったということを知っていただきたい。

●一人びとりがキリストに直結

そのような油をいただいで生きる。この油だけは私は何としてもいただかなければ、生きていられない者だから。こちらの方の五人は、油がなくて、あわてて買いに行つたが、天国は閉められてしまう。油が本当であれば、こんな八方破れのダメなやつでも、見る目をもって見れば、そこに何か私らしい光が、キリストの光が光っているはず。皆さん一人びとりがその通りです。だから、それを借りてしようとしたって、これはダメなんだ。聖霊は、借りてしようとしたってダメだ。聖霊はキリストからいきなり直接にいただかなければ、

「お前のところにある聖霊をひとつ貸してくれ」

なんてはダメなんだ。それをやろうとしたから、それはダメなので、このことは旧約聖書のエゼキエル書に素晴らしいことが書いてある。エゼキエル書18章20節、

「20 罪を犯せし^{たましい}靈魂は死ぬべし。子は父の悪を負わず、父は子の悪を負わざる

なり。義人の義はその人に帰し、悪人の悪はその人に帰すべし。」(エゼキエル

18・20)

という。

「義人の義はその人に帰し、悪人の悪はその人に帰すべし」

とは、旧約聖書の中の素晴らしい言葉の一つです。私の『ドイツ語固有名詞辞典』(研究社、1964年刊)の「エゼキエル」という項目を見てごらんください。この文句を私はあげてあるから。

「義人の義はその人に帰し、悪人の悪はその人に帰すべし」

借り物はならないよというわけです。



「義人の義」とは何か。私たちは、キリストに救われた義人です。いいですか。私たちはキリストに救われた義人である。信仰によって義とされた者である。その義はその人につく。即ち、義という内容は——「義」とは「羊の我」と書く——羊の我として神に本当に従っているところの信頼の我というのが、この義というものです。私たちが賜っているのは、キリストのこの義をいただいている「義人」であります。

これが即ち油の内容である。その義人の義は、いただいたその油はその人につく。分けられるわけにいかない。「悪人の悪」は即ちこの油をいただかないところの事態はその人に帰する。「貸してくださいと言ったって、それはダメだよ、天国は閉まってしまおうよ」というわけです。

神さまの御霊の法、聖霊の法則の世界は、自然界の物理界の法則よりも素晴らしい。カントが、

「私はこれを思えば思つほど、驚嘆すべき二つのことがある。わがうちなる道德の法則とこの星辰の空である」

と言う。即ち、物理界の法則の世界とわがうちなる道德の法則の世界です。しかし、それよりも素晴らしいのは、我々キリスト者にあるところの聖霊の法則の世界。パウロがロマ書8章2節で言っているところの「生命の御霊の法」です。

「²キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。」(ロマ8:2)

という、この驚くべき「御霊の法」の世界。これが私たちを罪と死の世界から解放している。私たちは、「義人の義」というこのエゼキエル書の言葉を新約の光をもって読むならば、キリストに賜りたるこの義人の義というものはその人に帰する。貸すわけにもいかんし、借りるわけにもいかん。お父さんが信仰があったから、子どもが信仰があるか。そうはいかん。お父さんが悪いやつだったから、子どもも悪いか。そうでもない。みなそれは非連続の連続で、一人びとりがキリストに直結しています。

●聖霊の幕屋

かくして、私たちが「神の国を待つ」とはどのようなことか。その時に、黙示録7章の幸いなる世界が展開してくるわけです。私は黙示録7章は非常に好きなのところの一つです。さきほどのイザヤ書みたいに。多くの人たちが讚美をしている。

「¹²『アアメン、讚美・栄光・智慧・感謝・尊貴・能力・勢威、世々限りなく我らの神にあれ、アアメン』」

と。「どういう群でしょうか」と聞いたところが、

¹³長老たちの一人われに向いて言う『この白き衣を著たるは如何なる者にして何処より来りしか』」



キリストの「白き衣」を着る。即ち、その実存が白き性格であります。義認から聖化となつていくことが必然なんだ。義認から、義とせられ、これが聖められていく。これが「白き衣を着たるはいかなる者であるか」ということです。

14 我いう『わが主よ、なんじ知れり』かれ言う『かれらは大なる患難なやみより出できたり、羔羊こひつしの血に己が衣を洗いて白くしたる者なり。

「羔羊の血によつて己が衣を洗つたら白くなつた」

なんていうのは、これは絶対に普通の常識ではわからない。物理の世界ではない。これは霊の世界です。

「汝らの罪は紅の如くあるとも、白くなる」

とイザヤ書の中にもある通りです。

15 この故に神の御座みくらの前にありて昼も夜もその聖所にて神に事つかう。

その聖所には何か神殿があるかと思つたら、神殿も何もなかった。

「神と羔羊が即ち神殿であり光である。日月もこれを照らすを要せず」

という。究極の世界です。そういう言葉をもつて言われているところの、

「神の幕屋、人と共にあり。人、神と共にあり」

という「神の幕屋」です。

私たちが「聖霊の幕屋」です。その構造は三角垂体で、ABCという私たち一人びとの底面と、神(頂点G)・キリスト(底点X)という大黒柱(垂線GX)によつて立っている。即ち、神・キリストと私たちの関係が、これが即ちエクレスシアの関係であります。エクレスシア、教会というものの本当の姿は、このように神・キリスト(GX)と直結しているところの、GXAという三角形がなしているような事態が我々の実存の構造である。またGX Bであり、またGXCである。この中に充滿している空気は何かというと、これが御霊である。御霊という空気が充滿している。そして、御霊が充滿しているから、ここは明るい。ただし、現実には、たくさんこれは破れている。星が見えるくらいに。破れ幕屋でございしますが、どっこい、中は明るくて暖かいというのが、この私たちの集会、「幕屋」と申し上げているゆえんです。それを「教会」と言おうが何と言おうがいいですよ。だから、

御座みくらに坐したもう者は彼らの上に幕屋を張り給うべし。

と。ヨハネ伝の

「我らの間に肉となつて宿つた」

というのは、

「幕屋を張り給うた」

という言葉です。



●存在と使命

16 彼らは重ねて飢えず、重ねて渴かず、日も熱も彼らを侵すことなし。17 御座
の前にいます羔羊は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目

より凡ての涙を拭い給うべければなり』(黙示録7・12～17)

私たちは今は涙があります。しかしながら、涙はあるけれども、既に涙は拭われているという現実をいただいている。クリスチャンは、世界の、また自分の罪というものに対して涙を流す。人一倍の涙を流す。けれども、それは人一倍の歓喜を持っているから、それを覆っていくことができる。拭っていくことができる。キリストの聖霊の喜びというものは——喜びの音信ですから——喜びが悲しみを覆っている。そして、それを背負っていく。その背負っていく現実が今あるから、必ずその時には完全に成りますよというわけです。終りに約束されていることは全部、ひとつの根源の事実として我々の現実に来ている。これがヨハネ伝の素晴らしきなんです。ヨハネ伝の素晴らしきは、そういった現実をグッと展開している。そこで、ヨハネ黙示録がその現実を驚くべき希望としてそこに掲げている。

そういうわけで、もう、何とも言えないです。悲しめる人、悩める人、苦しめる人、病める人を、どういうことでも本当にその人を喜びの世界に、生命の世界に入れるものがありますから、何とかしてこれを具体的に伝えていくのが、この福音者の存在であり、同時に使命である。存在と使命とが別々ではありませんよ。これが一貫に、一つとなる。

そういうのが本当の生命です。ただ永遠に時間的に永く生きる、そんなものは生命ではない。生命とはそのような、もう現在において永遠的な質を持っているところの、現在において滅びざるものを持っているところのものです。私たちの希望がそういうことじゃないですか。実に現実であつて、明日にも来て、

「はい。アーメン、ハレルヤー!」

と言う。居ても立つてもらえない。

どうか、そのようにして、この福音は進み行かざるを得ない。質的にです、ただ数を言っているのではない。質的に、一人、二人、三人と本ものを、どうか、皆さん、祈り求めて作ってください。神さまがそういう人たちを作られていくときに、一人の人がそのような悔改めをなすときに——九十九人をそっちのけにして、一人の失われたる者を探し出して、これを救ったときに——何という喜びがあるかという。やっぱり、キリストは或る一に向かつて進んでいる。そうしたらば、この九十九というのが次第にだんだん、二、三、四と、一人ひとりが進んでいく。本当の伝道とは、身をもつて行くところの伝道です。それを悲願、靈願という。キリストの本願に対する我々の悲願はヒタリ一つとなって進んで参ります。

かくして、信仰と愛と望みは一如となって、皆さんの中に形成された。キリストの姿がいよいよ成りますように祈っております。

